



静岡県市長会長賞

人と動物をつなぐ

二年 西ヶ谷莉園

私には、大切な家族がいる。名前は「マル」フェレットの女の子だ。フェレットはあまり馴染みのない動物かもしれないが、実はとても人懐っこく、賢くて可愛い。私は七歳のとき、兄がクリスマスプレゼントとして、「動物を飼いたい」となり、ペットショップに行き、マルと出会った。

マルは最初、中々人になれなかった。ケージのすみに丸まって、こちらを警戒するようにじっと見ていた。私は毎日「おはよう、マル」「おやすみ、また明日ね」と声をかけ、ご飯やおやつをあげながら、少しずつ心の距離を近づけていった。

ある日、私が学校から帰ってきたときのことだ。玄関のドアを開けると、マルが私の足もとにトコトコと走ってきた。そして、クンクンと匂いをかいで、しっぽをフリフリさせながら私の手にすり寄ってきた。私は思わず「マル……！」と声を上げた。それは、初めてマルが自分から心を開いてくれた瞬間だった。

それから私たちは、まるで親友のようだった。宿題をしているとマルが机の下にやってきて丸くなって寝る。テレビを見ているときは、隣でじゃれついてくる。夜寝るときには、私の手を舐めてから自分の寝床へ行く。そんな日々が続くうちに、私は「この子を一生大切にしよう」と強く思うようになった。

けれど、動物の命は人間より短い。去年の秋ごろから、マルは少しずつ元気がなくなってきた。ご飯をあまり食べなくなり、動きもゆっくりになった。病院に連れて行くと、先生は「高齢による体力の低下ですね。でも、きちんとお世話をすれば、まだまだ頑張れますよ」と言ってくれました。

それから、私は毎日マルの体を温めたり、食べやすいペーストのご飯をあげたり、できる限りのことをした。何より、「大好きだよ、マル」と声を掛けることを欠かさなかった。すると、マルは少しずつ元気を取り戻し、また私のひざの上でうとうと眠るようになった。私は心の底から嬉しかった。

私はこの経験を通して、動物と人との間にも深い絆が生まれることを学んだ。マルはただのペットではなく、私の心の拠り所であり、大切な家族なのだ。だからこそ、私はすべての動物も、人間と同じように大切にされるべき存在だと思っている。

これからも私は、マルとの毎日を大切にしながら、動物たちの命の尊さを忘れずに生きていきたい。動物に優しい社会を作るのは、私達一人ひとりの行動から始まると思う。まずは目の前の命を、心から大切にすること。それが本当の動物愛護なのだ、私は信じている。